

## 江戸時代における『仏祖統紀』の出版

會谷 佳光

### 一 はじめに

『仏祖統紀』（以下略「統紀」）は、南宋の理宗朝末期から度宗朝にかけて、天台宗の釈志磐が『景德伝灯録』をはじめとする禅宗の灯史に対抗し、天台宗の正統を明らかにする目的で編纂した仏教史書であり、その内容は天台宗のみならず、仏教の歴史全般に及び、さらには儒教・道教に関する史事に旁及する。

本書の出版は数多くの勸縁者の協力を得て、その執筆中の咸淳元年から四明東湖の地で開始され、まず咸淳七年に四十巻が完成・印造された。その後、宋末には編年体の中国仏教史である法運通塞志十五巻を加えた五十五巻本が刊行されたようである。このうち宋版四十巻本は現在北京図書館に所蔵されるが、宋末の開版と見られる五十五巻本は、日本の洪江全善・森立之『経籍訪古志』に狩谷棧斎旧蔵書として著録されるのみで現物は伝わらない<sup>②</sup>。元代における出版は確認できていないが、明代には、洪武年間に南京で開版され永楽元年に完成した官版大蔵経、洪武南蔵に収録されたのをはじめ、永楽帝の命で洪武南蔵を再編・重刊した永楽南蔵に収録され、さらには万暦年間に民間で開版された嘉興版大蔵経（以下略「嘉興蔵」）に収録された。これら明版はいわば五十五巻本のバリエーションであり、洪武南蔵本では底本が巻第二十一を欠いていたた

め、これを建文年間に僧録司左善世であった釈溥洽が統編した。靖難の変で即位した永楽帝は建文帝の存在を歴史から抹殺しようと努め、さらに建文帝の寵愛を受けた溥洽を囚禁し、永楽南蔵本から溥洽の統編した卷第二十一を削除し、卷第二十二以降を一巻ずつ繰り上げた。しかし巻首にある目録は五十五巻本のままであったため、本文と目録の間に巻数の不一致が生じた。嘉興蔵本は永楽南蔵本を重刊する際にこの不一致に気づき、本文に合わせて目録を五十四巻に変更した。この嘉興蔵本は光緒三十四年に重刊された他（明治大学中央図書館蔵）、『大正新脩大蔵経』所収本（以下略「大正蔵本」）の底本（増上寺報恩蔵所蔵本）にも用いられた。

日本では、江戸時代に古活字本とその覆刻本、及び嘉興蔵本の覆刻本の計三種が出版されている。これら諸本は版によって内容構成・本文に相当の異同があり、その書誌学的研究はすでに佐藤成順氏によって先鞭がつけられている。佐藤氏は、『大日本統蔵経』所収本（以下称「正統蔵本」）と大正蔵本という最もポピュラーなテキスト間に存する異同について詳しい分析を行った<sup>3)</sup>。しかしながら江戸時代に出版された和刻本については考察が簡略であり、なお多くの検討課題が残っている。そもそも江戸時代、寛文天和間に鉄眼禪師によって黄檗版大蔵経（以下略「檗蔵」）が刊行されて以来、和刻本仏典の出版と檗蔵とは非常に密接な関係を保ってきた。しかし佐藤氏の論文では和刻本『統紀』と檗蔵との関係について全く言及していない。また正統蔵本『統紀』と和刻本とに共通点が多いと結論するのにもかかわらず、この和刻本がどういった経緯で出版されたものであるかについてはほとんど考察を加えていない。そこで本稿では檗蔵との関係を含めて和刻本の出版について書誌学的な考察を加えてみたい。

なお本稿末に『仏祖統紀』版本系統図』を付したので随時参照されたい。

## 二 古活字本

『統紀』の古活字本は、現在、大東急記念文庫（久原文庫旧蔵本）<sup>④</sup>・杏雨書屋（内藤湖南恭仁山莊旧蔵本）に所蔵され、また現在行方不明ながら詳しい書誌と書影が伝わるものに栗田文庫本がある。<sup>⑤</sup>今回、大東急記念文庫本を調査する機会を得られたので、その書誌を記すと次のようである。

仏祖統紀五十五卷 原欠卷第二十一 宋釈志磐撰 全三十一冊<sup>⑦</sup>

単辺縦二十二・七横十六・二 有界十一行二十字注文小字双行 双花魚尾小黒口 無点 有図

首咸淳五年釈志磐「仏祖統紀序」次「掌局齋生 真要」以下校正僧五名勸縁邑士三名校正賛縁居士二名連記 次「仏祖統紀通例」次咸淳中釈志磐「仏祖統紀目録」次「教主釈迦牟尼仏本紀第一 仏祖統紀卷一／天宋景定四明東湖沙門志磐撰」以下至卷五十五 巻頭編著事項巻第二十七第二十九第三十五至第三十八第四十至第五十一「景定」作「咸淳」 巻第五十二至第五十五「景定」作「咸淳」又「東湖」作「福泉」 一部巻末有刻工者名勸縁者名 次咸淳七年釈志磐「刊板後記」 版心題「統紀」 無刊記 題簽題「仏祖統紀」（写） 墨消し印記二種

匡郭の四隅には活字本の特徴である切れ目が確認できる。巻第三十二第三十三には計十点の図があり、そのうち七点が整版である。無刊記本であるが、川瀬一馬・山鹿誠之助両氏は慶長元和間、栗田氏は慶長年間の古活字印本と鑑定する。川瀬氏は刊年判定の根拠を「褐色原表紙の裏に慶長版節用集（行書体）の摺遣を使用してゐるものがあり、本書の活字の様式から見て、寛永までは降らぬものと見られる。」とする。川瀬氏等の説に従い、慶長元和間の印刷と見ておきたい。

佐藤氏は古活字本の覆刻本（以下略「覆古活字本」、次節を参照）と共通点の多い正統蔵本を分析し、これが宋版四十巻本の原型を伝える一方、志磐没後の史事の加筆が見られることに言及する。しかしながら、そのオリジナルである古活字本については『新纂禅籍目録』に著録されることに触れたにすぎない。古活字本中には古活字本出版時の序跋が存在しないため、その出版の経緯を明らかにすることは困難であるが、可能な限り考察を加えてみたい。注目すべきは次の六点である。

### ①巻数と序目の内容

古活字本の巻数は、巻首の自序が「凡之為五十四卷。」と記すのに対し、目録は五十五巻の内容構成を伝え、本文も巻第五十五で終わる。ただし全五十五巻のうち巻第二十一を欠く。巻第二十一は目録によれば諸師列伝第十一であり、『統紀』の解題である巻首の通例にも「：作諸師列伝十一巻。」とあるから、本来巻第二十一には諸師列伝第十一があつたと見られる。この状況は洪武南蔵本でも全く同じである。よつて古活字本と洪武南蔵本の底本はともに巻第二十一を欠く五十五巻本であつたことがわかる。ただし古活字本は洪武南蔵本のように巻第二十一を溥洽の統編によつて補っていない。また古活字本は咸淳五年志磐自序の次に「掌局齋生、真要」と記し、次いで『統紀』の校正に当たつた僧侶五名を連記し、次いで勸縁邑士三名・同校正賛縁居士二名を記し、宋版四十巻本もこれと同様であるのに対し、<sup>8)</sup> 洪武南蔵本系統の諸本には掌局齋生・勸縁邑士・同校正賛縁居士が記されていない。このことから古活字本の底本は洪武南蔵本系統のテキストではなく、それ以前の宋版四十巻本に直接連なるテキストであつたことがわかる。

## ②各巻の巻首の書式

各巻巻頭第一行は篇名、各巻の巻次、書名（仏祖統紀）、全体の巻次の順に記し、第二行の編著者事項には「天宋」と冠している。このうち第一行の書式は正史の体裁に倣つたもので、宋版四十巻本と全く同じである。王朝名に「天」字を関するのほ他に例を知らないが、「大宋」というのと同様、自王朝に対する敬称と見てよいであろう。これに対し、洪武南蔵本系統のテキストでは、巻頭第一行に書名、全体の巻次だけ記し、第三行に篇名、篇次（一〜十九）、各巻の巻次を記し、<sup>9)</sup> 第二行の編著者事項に「天」字がない。これは明王朝の官版である洪武南蔵本では宋王朝に対して敬称を用いる必要がなかったからである。逆にいえば、古活字本が「天宋」に作るのほ、その底本が宋版であつたことを示している。

## ③宋版の勸縁者・刻工名

宋版四十巻本には全四十巻中、二十六巻に勸縁者・刻工名が刻されているが、その一部が古活字本にも見られる（校正者・勸縁者・刻工名対照表）を参照。その内訳は次のようである。

a 宋版四十巻本にあり、古活字本にもある。 卷第四第五第十二第十三第五十第五十一の計六卷

b 宋版四十巻本になく、古活字本にもない。 卷第十一第十七至第二十第二十五第二十六第二十九第三十三第三十七至第三十九第五十五の計十三卷<sup>⑩</sup>

c 宋版四十巻本にあり、古活字本にない。 卷第一第二第六至第十第十四至第十六第二十二至第二十四第二十七第二十八第三十至第三十二第三十四の計十九卷

このうち a・b は、古活字本の勸縁者・刻工名の記載状況が宋版四十巻本と全く同じ例である。なかでも両本で巻次が異なる名文光教志二巻<sup>⑪</sup>に、全く同じ勸縁者・刻工名が見られることから、古活字本はやはり宋版四十巻本と非常に密接な関係にあったことは間違いない。おそらくその底本は宋版四十巻本そのもの、またはその重刊本に対して、法運通塞志十五巻を加えたものであろう。a・b に対し、c は勸縁者・刻工名の記載状況が宋版四十巻本と異なる例である。この異同が古活字本の底本の段階で生じたものか、古活字本の組版の段階で生じたものかは定かではないが、宋版四十巻本と異なる部分があることを示す例として注目する価値がある。

④ 法運通塞志十五巻の存在とその挿入位置

法運通塞志十五巻は宋版四十巻本には収録されていないが、古活字本では宋版四十巻本の卷第三十四法門光顯志と卷第三十五名文光教志の間に挿入されている。この挿入位置は洪武南蔵本系統の諸本と一致するが、日本には洪武南蔵・永楽南蔵ともほとんど伝入しておらず、嘉興蔵本は古活字本とほぼ同時期の万曆四十二年序刊本であり、古活字本刊行当時はまだ日本に伝わっていなかったと見られる。以上の点から、古活字本の開版者が洪武南蔵本系統の諸本を参考にして、この位置に法運通塞志を挿入したとは考えにくい。むしろ古活字本の底本においてすでにこの位置に挿入されていたと考ええるべきである。その底本は宋版四十巻本でも洪武南蔵本でもなく、両本の間位置するテキスト、つまり宋版五十五巻本であったと考えるのが自然であろう。

## ⑤ 儒教・道教・讖記に関する記事の存在

この問題については、すでに佐藤氏が指摘している。佐藤氏は、覆古活字本と共通点の多い卍統藏本と、嘉興藏本を底本とした大正藏本とを比較分析し、これらの記事が宋版四十卷本・卍統藏本ともに存在するのに対し、大正藏本には一貫して存在しない点に気づき、『統紀』が洪武南蔵に入蔵される際に意図的に削除されたものであるかと結論する。近年刊行された洪武南蔵の景印本を調べてみると、これらの記事は存在せず、佐藤氏の推測が正しかったことを確認できる。古活字本にはこれらの記事がそのまま残っていることから、古活字本が洪武南蔵本系統の諸本よりも『統紀』の原型に近い姿を伝えていることがわかる。

## ⑥ 志磐没後の史事の加筆

このこともすでに佐藤氏が指摘している。ただ佐藤氏は覆古活字本と共通点の多い卍統藏本に依拠して考察を加えたにすぎず、覆古活字本のオリジナルである古活字本についてはほとんど言及しない。佐藤氏は後人の加筆が甚だしい巻として巻第十九諸師列伝と巻第四十九法運通塞志を特に取り上げるが、いま古活字本の巻第四十九法運通塞志を見てみると、覆古活字本との間に大きな異同が存在する。

古活字本では巻第四十九の第三丁から第五丁表まで理宗朝の史事を記した後、第六丁から再び「理宗（嘉定十四年：）」として理宗朝の記事を記すのに対し、覆古活字本では古活字本第三丁から第五丁表がなく、理宗朝の再述部分が第三丁から始まり、最終丁は古活字本より三丁少ない第二十丁となっている。また古活字本の第六丁以下、つまり覆古活字本の第三丁以下では、理宗朝の記事の後に、元王朝の滅亡までを記す他、さらに遼・金の史事にも言及しており、志磐没後の記事はここに集中している。洪武南蔵本系統の諸本を見ると、古活字本の第一丁から第五丁表に相当する部分しかなく、第六丁以下はない。また古活字本の目録には「第四十九卷／法運通塞志八／宋（寧宗 理宗）」とあるだけで、遼・金・元の名は見えない。以上の点から、洪武南蔵本系統の諸本と共通する古活字本の第五丁表までが志磐の筆になり、第六丁以降は、理宗朝の

再出部分を含めて後人の加筆と見るのが妥当であろう。ということは、覆古活字本は、知ってか知らずか、志磐の親筆と見られる第三丁から第五丁表までを削除し、わざわざ後人の加筆部分を残してしまったのである。

また巻第四十九には、「天宋」・「大元」（十丁裏六行目等）・「大明」（二十一丁裏九行目）といった王朝を尊重する言葉が複数混在する。おそらく志磐没後、元人・明人によって書かれた史料が、どこかの時点で『統紀』の本文に取り込まれたものであろう。ただし明人がこれらの記事を取り込んだのであれば、他王朝の敬称をそのまま残すとは考えがたいし、明代になって元王朝ゆかりの人物が取り込んだのであれば、みずからの王朝を滅ぼした明王朝に対し「大明」という敬称を用いるとは考えがたい。そこで、これら志磐没後の史事は中国以外の場所で加えられたと考えてみたい。その場合、まず想定されるのは古活字本刊行の地、日本であり、次いで日本への主要な書物伝播ルートである朝鮮である。

以上の考察をまとめると、古活字本は、洪武南蔵本以前のテキスト、つまり宋版四十巻本（またはその重刊本）に法運通塞志十五卷を加えて宋末に刊行された五十五巻本（原欠巻第二十一）を底本として、志磐没後の史料（日本人もしくは朝鮮人の手になる可能性あり）を取り込んで刊行されたものであると推測される。

### 三 覆古活字本

覆古活字本は、今回調査しただけでも、下記の機関に所蔵される。

東洋文庫（岩崎文庫。請求三―D―b―五）

成田山仏教図書館（請求四九―六七。以下「成田本」）

国立国会図書館（請求八二―一―四九。以下「国会本」）

身延山大学図書館（請求星二―一―C九二―三―A六―三〇、簡単な調査のみ）

駒沢大学図書館二部（請求二一四/W一A、欠第一冊、以下「駒本A」。請求二一四/W一、以下「駒本B」）  
 東京大学総合図書館二部（請求C四〇―四五〇四、以下「東総本A」。請求C四〇―二七、以下「東総本B」）  
 大東急記念文庫（請求三一函三七架四一二番。以下「大東急本」）  
 著者も一部所蔵しており、日本で最も流布した『統紀』の版本である。いま最も早印と見られる成田本の書誌を記すと次のようである。

仏祖統紀五十五卷 原欠卷第二十一 宋釈志磐撰 全二十冊 原裝二十一冊

単辺縦二十二・三横十六・〇 無界十一行二十字注文小字双行 双花魚尾小黒口 句送返縦点 有図

卷首至版心題与古活字本同 無刊記 題簽題「仏祖統紀」 印記「成田／図書／館蔵」

その版式は慶長元和間古活字印本と全く同じであり、なおかつ整版にもかかわらず活字版のように字並びがガタガタして、両版の字様も近似する等、古活字本を版下にして訓点を加えて覆刻したものであることは明らかである。

開版時期について、『大東急記念文庫書目』は寛永頃と推測し、『東京大学総合図書館漢籍目録』は江戸初期とする。そもそも古活字本は近世初期の約五十年間に盛行した後、再び整版にとって代わられたが、その整版による覆刻は古活字本出版に近接した寛永年間に多く行われた。<sup>13</sup>この時期に『統紀』の覆古活字本の開版時期を想定する目録が多いのは、そのためであろう。寛永年間かそれに近い時期の開版と見てよからうが、刊記がないため確かな開版年はわからない。これを知るための唯一の手がかりは、東洋文庫本の巻首・巻尾に捺される次の納経記である。

掃雲院殿無染了心大姉、喜捐淨資、請三藏聖教六千七百七十一卷、新建経蔵於此山以奉之。所冀功利、三塗八難、共得脱苦、報徳洽被、四恩三百、同成妙果。

天和二年歳次壬戌正月初三日江州祥寿山清涼禪寺住持比丘大寧門朔寅識  
 「江州祥寿山清涼禪寺」は滋賀県彦根市に伝わる曹洞宗寺院で、慶長六年、彦根城主井伊直政が上野国の叢明寺十五世愚

明正察を招いて開山とし、のち井伊家の菩提寺となった。<sup>14</sup> この納経記は、天和二年に清涼禪寺に「三藏聖教六千七百七十一卷」が納経された記録として作成・押印されたもので、東洋文庫本がそのうちの一点だったことを示している。天和二年の納経であるから、その開版・印造がそれより以前であったことは確実である。東洋文庫本は版面の状態がさほどよくないことから、開版後ある程度年月が経ってから刷られたものと思われるが、現状では他に覆古活字本の開版時期を詰める資料が見つかっていないため、しばらく寛永天和間の開版としておきたい。<sup>15</sup>

その開版者についてもほとんど手がかりがないが、底本である古活字本と同一人であるかどうかは確認することができない。前節で述べたように、『統紀』卷第三十二第三十三には「華藏世界図」をはじめ多くの図が収録されているが、古活字本ではこれらの図のうち七点のみが整版である。よって両版の開版者が同一であれば、整版の図だけは同版でも不思議ではない。そこで両版の図を見比べたところ、非常によく似てはいるものの、字様や図柄が微妙に異なり、異版と見て間違いない。よって古活字本と覆古活字本の開版者は別人であった可能性が高いといえる。

覆古活字本は、古活字本の覆刻とはいっても、ただ闇雲に古活字本に従っていたわけでは決してなく、古活字本を補訂しようとした痕跡も見受けられる。例えば、古活字本志磐自序「至於遺逸而不取者則拳皆此失」の「拳皆」を、覆古活字本では「皆拳」と改めている。この箇所は宋版四十卷・洪武南藏本系統の諸本でも「拳皆」に作ることから、覆刻の際に独自の判断で校正したことになる。<sup>16</sup>

佐藤氏は覆古活字本のことを日本版本と呼び、卍統藏本は日本版本と近いが異なる部分も多く、その底本が日本版本であるとはいえず、これを嘉興藏本で補足したものらしいとする。調べてみると、卍統藏本の巻首には明人の序跋三篇があるが、これは欠丁・錯丁のある嘉興藏の日本覆刻本（以下「覆嘉興藏本」）の序跋三篇を、嘉興藏本の二序本<sup>17</sup>に基づいて再構成し、錯丁を修正したものと見られる。また志磐自序の後に掌局齋生真要・勸縁邑士三名・同校正賛縁居士二名が記されず、校正僧五名のみ記す点は洪武南藏本系統の諸本と一致する。これに対し、通例に続く目録は古活字本・覆古活字本と一

致するが、最後に嘉興蔵本・覆嘉興蔵本にのみ見られる音釈を付す。本文を見ても、覆古活字本にだけ存する文章が卍統蔵本に存在したり、各巻巻頭の書名・篇名の記し方は洪武南蔵本系統と一致するのにも、編著者事項と篇名に付された校記の内容は宋版四十巻・古活字本・覆古活字本と一致する。また各巻巻末には、宋版四十巻・古活字本・覆古活字本の諸本にのみ見える勸縁者・刻工名を記す一方、嘉興蔵本・覆嘉興蔵本の音釈を付す。

以上の特徴から、卍統蔵本は基本的に覆古活字本に対して底本に準じた扱いをしているものの、適宜嘉興蔵本・覆嘉興蔵本を使って本文の修正・補遺を行っていて、覆古活字本を校記に回す場合もあったことがわかる。おそらく卍統蔵の編集者は底本を定めて校異を注記していくという方法を敢えてとらず、諸本を鳩合して新たな定本を作成しようとしたのである。『統紀』に限らず、卍統蔵はよりよいテキストを作って仏教界に広く提供することを目的に編集されたのであろうが、その反面、校記等が不十分であり、底本・校本に用いたテキストの原型を知りたい場合に多大な困難を伴う場合が少なくない。例えば、卍統蔵中には、本来別物であった序跋と本文が何の注記もないまま一書にまとめられているものがまま見受けられる<sup>18)</sup>。よって卍統蔵を利用する際には、これが上記のような方法で再編集されたテキストであることを十分認識し、細心の注意を払って読まなければならないのである。

#### 四 黄檗版大蔵経との関係

本節では、『統紀』の和刻本と、江戸時代の和刻本仏典の出版に甚大な影響を与えた檗蔵との関係について考察する。檗蔵は寛文九年から天和元年にかけて黄檗宗の鉄眼禪師が募縁刊行した大蔵経である。その大部分は嘉興蔵を覆刻したものであるが、底本に用いた嘉興蔵に欠本が多かったのか、檗蔵初期の刷り本では、嘉興蔵本ではなく、当時流布していた和刻本等で代用された經典がかなりある。この代用本を「入れ版」と呼ぶ<sup>19)</sup>。ところが後の刷り本になればなるほど、この入れ版は

覆嘉興蔵本に改刻されていった。覆嘉興蔵本への改刻が成ると、それまで用いられていた入れ版の版木は民間の書肆に流れて印造され続けていたことが、これまでの調査によって明らかとなっている。<sup>20</sup> 槩蔵の入れ版・改刻の問題は、現在槩蔵研究の中で注目課題の一つとなっている。そこで、『統紀』と槩蔵との関係を考える前に、入れ版・改刻を見分けるポイントとなる槩蔵の特徴について簡単に説明しておきたい。

### 1. 槩蔵の特徴

入れ版にしろ改刻にしろ一セットの槩蔵であれば、それが槩蔵本であることは一目瞭然であるが、実際に目にするのはその多くが離れ本として現在に伝わるものである。この離れ本が本来槩蔵の一部であったか否かを見分けるには、いくつかのポイントがある。

#### ① 納経記の類

大蔵経は分量が二千冊前後に及ぶため、寺院等に納経される際、納経の由来を記した版木（或いは印）が作られ、副葉や巻首・巻尾に刷られることがままあり、こういった納経記から槩蔵の離れ本であることが判明することがある。納経記には納経年が記されていることも多く、印刷時期の特定に役立つ。

#### ② 題簽・表紙等の装訂

槩蔵の題簽は用紙が青、双辺の匡郭を持ち、匡郭内は三段に分かれたれ、上部には経・律・論・印度著集・支那撰述等の分類、中部には經典名・収録巻次、下部には千字文が記され、表紙の色は朽葉色である。この装訂は底本である嘉興蔵を踏襲したものである。このような装訂の和刻本は槩蔵の離れ本である可能性を想定しなければいけない。

#### ③ 千字文と分冊

槩蔵の分冊には大蔵経の検索ツールである千字文の存在が大きく影響している。槩蔵の千字文は、明代の永楽北蔵から嘉興蔵へと継承された千字文を流用したものである。永楽北蔵は六行十八字の版式で、折本で装訂され、千字文一字に対して十帖を割り当て、天一・天二…天九・天十の十帖で一函としていたのに対し、嘉興蔵は半葉十行二十字の版式に改め、冊子本で装訂されたため、一葉の字数が増加した。その結果、永楽北蔵では千字文下部の漢数字（一至十、まれに十一・十二）がその千字文の帖次を示していたのに対し、嘉興蔵では、例えば一冊中に天一から天三が含まれるといった具合に、単なる千字文の整理番号になり変わってしまった。これは、当初巻物の体裁の書物を数える量詞であった「巻」が、冊子本の時代になって、単なる内容の一区切りを表す言葉に変わってしまった経緯とよく似ている。

また嘉興蔵は薄い竹紙に刷られたのに対し、槩蔵は竹紙よりも分厚い和紙に刷られたため、嘉興蔵の分冊を踏襲すると、どうしても一冊が分厚くなりすぎてしまう。そこで、例えば嘉興蔵では天一から天五で一冊、天六から天十で一冊としていたものを、槩蔵では天一から天三で一冊、天四から天六で一冊、天七から天十で一冊といった具合に、和紙の厚さに合わせて嘉興蔵の分冊を変更した。

千字文は大蔵経という膨大な叢書の中で目当ての経典を探し出すための検索ツールであり、同冊内に二つ以上の千字文が混在することは検索効率上好ましくなく、ある特定の場合を除き、一冊中の千字文が一字になるよう配慮されている<sup>21</sup>。さらに、この千字文は槩蔵各冊の題簽にも彫られ、槩蔵の分冊はこの題簽に従って厳密に守られた。このようなわけで、槩蔵の離れ本か否かを判断する際、分冊が重要なポイントとなりうるのである。もちろん改装の可能性もあるから、分冊だけで槩蔵の離れ本か否かを判断できるわけではない。ただ分冊が槩蔵本と一致するものは、槩蔵の離れ本である可能性を考慮してみる必要があるのである。

#### ④扉絵（仏画）と韋駄天像の存在

南蔵・北蔵等の折本では、千字文を同じくする十帖から十二帖を一函（帙）とし、このうち第一帖の巻首に扉絵、末帖の

巻尾に韋駄天像が決まって付されていた。しかし嘉興蔵では、先述のように、装訂を冊子本に変更した結果、一冊の厚さが薄くなり、同じ千字文が付された冊ごとに一函とする原則が崩れ、一函中に異なる千字文が混在するようになった。その影響で、嘉興蔵及びその覆刻本を主とする槩蔵では扉絵と韋駄天像の位置に変化が生じた。例えば、千字文が数字に渡る經典では、その第一冊の巻首に扉絵、末冊の巻尾に韋駄天像を付し、一字につき数種類の經典を収録する千字文二・三字分で一函となっている場合には、最初の千字文の第一冊の巻首に扉絵、最後の千字文の末冊の巻尾に韋駄天像を付す<sup>23</sup>といった具合である。

##### ⑤ 版式と刊記

①から④は、入れ版・覆嘉興蔵本にかかわらず、離れ本であるか否かを見分けるポイントとなるが、覆嘉興蔵本に関していえば、その版式・刊記も見逃してはならない。槩蔵中の覆嘉興蔵本の一般的な版式は、双辺、無界十行二十字注文小字双行、匡郭は半葉ごとに二重の四角枠で本文を囲み、版心に魚尾はなく、上中下に単線の枠がある。上部の枠には経律論等の分類、中部の枠には經典名・巻次・丁次、下部の枠には千字文とその整理番号（一至十）が記される。嘉興蔵で千字文を割り当てていない經典の版心は、墨格（未刻の墨刷り部分）となっている。また字体は明朝体が採用されている。ただし槩蔵の開版以前にもしばしば經典単位で嘉興蔵が覆刻されていたから、これと同じ版式・字体のものがすべて槩蔵の離れ本というわけではない。

槩蔵の刊記は巻末に木記の形で刻されることが多いが、全ての巻の巻末に刻されるわけではなく、刊記が全くない經典もあれば、全巻にある經典もあり、刊記のある巻・ない巻が入り交じっている經典も多い。その基本形式は、まずその巻を刊刻するための出版費用を寄付した募縁者名を列記し、ついで願文を記した後に「沙門鉄眼募刻」「沙門鉄眼募縁重梓」等と記し、最後に開版年月を記して開版地の「黄槩山宝蔵院に識す（黄槩山宝蔵院識）」と結ぶ。この形式の刊記が見られるものは、槩蔵の離れ本と見てまず間違いない。

上記の点を踏まえて、以下に『統紀』と槩蔵の関係について考察したい。<sup>(25)</sup>

## 2. 覆古活字本による入れ版

現在伝わる槩蔵の中で最初期に印造されたのは、法輪山正明寺（滋賀県日野町）所蔵本で、延宝六年から天和元年頃、後水尾法皇に献上された後、同寺に下賜されたものである。<sup>(26)</sup> 正明寺本の『統紀』は未見ではあるが、本稿末【和刻本諸本内容構成対照表】を見ればわかるように、他の覆古活字本と同じく、五十五巻本で、そのうち巻第二十一が原欠であり、各巻の丁数も一致するから、覆古活字本で納経されたものと見て間違いない。この正明寺本の分冊は十五冊である。この他、槩蔵初期の刷り本としては獅谷法然院（京都市左京区）本・曜光山月山寺（茨城県桜川市）本が著名である。両寺の槩蔵収録経典目録によれば、『統紀』はいずれも十五冊に分冊されており、さらに五十五巻原欠巻第二十一であることから、やはり覆古活字本と見られる。<sup>(27)</sup> 現在単独で伝わる覆古活字本には十五冊本と二十一冊本の二系統があるが、以上の点から考えて、かつて槩蔵に入れ版されたのは十五冊本であると見てよい。なお覆古活字本を十五冊に分冊すると、傍目にも一冊が分厚くなりすぎる。これに対し、二十一冊は自然な分冊であり、このことを証明するかのようになり、覆古活字本のオリジナルである古活字本もやはり二十一冊に分冊する。

今回調査した中で十五冊に分冊されるのは、東洋文庫本と駒本A（第一冊欠）の二部であり、前者の第一冊巻首と両本の第十五冊巻尾には槩蔵特有の扉絵・韋駄天像が付されているから、槩蔵の離れ本である可能性が高いと見てよい。このうち東洋文庫本の巻首・巻尾には、先述のように、天和二年に掃雲院殿無染了心大姉の浄資によつて奏請され、近江祥寿山清涼禅寺に新たに建てられた経蔵に大蔵経六千七百七十一巻を納めたことを記した納経記が捺されている。この『統紀』が槩蔵の入れ版と同じ分冊であることから、清涼禅寺に納められた大蔵経は槩蔵であったと見てよい。天和二年は槩蔵完成の翌年

であるから、槧蔵最初の刷り本のひとつということになる。

さて覆古活字本が槧蔵に入れ版されていたということは、槧蔵の開版以前にすでに単行本として印刷流布していたことを意味する。本稿末【覆古活字本版面状態対照表】は覆古活字本の諸本の版面の痛み具合を比較したものである。これを見ればわかるように、二十一冊本のうち槧蔵の入れ版である東洋文庫本より傷が少ないのは成田本・大東急本・国会本・家蔵本・東総本Bの五本である。よって、この五本は槧蔵に入れ版されるよりも前に印造されたものと見て間違いない。

以上、『統紀』は、槧蔵印刷の初期においては覆古活字本によって入れ版されていたことが確認できた。現在単独で伝わる覆古活字本には十五冊本と二十一冊本の二系統があるが、十五冊本は槧蔵に入れ版されていたものが後に離れ本となったものである可能性が高い。ただ『統紀』を十五冊に分冊すると、一冊の分量が多すぎる。その点では二十一冊本の方が自然な分冊であり、これが本来の分冊であったと考えられる。二十一冊本の中には十五冊本より版面の痛みが少ないものがあるが、これらは槧蔵に入れ版される以前に単行本として印造されたものと見てよいのである。

### 3. 覆嘉興蔵本への改刻

これまで『統紀』に対して改刻がなされたとの研究報告は管見の限り一つもない。その原因は、一つには、和刻本仏典全般に対する版本調査がこれまで十分に行われていなかったためである。もう一つには、嘉興蔵本と、その覆刻本である槧蔵は明朝体で刻され、明朝体の普及に一役買ったことで知られるが、覆古活字本・改刻本には、明朝体で刻されていないという共通点があったために、近年刊行の槧蔵の現存目録では明朝体でないことが注記されるばかりで、両版が異版であることが見逃されやすい状況にあったためである。しかし槧蔵所収の『統紀』が覆古活字本から覆嘉興蔵本へと改刻されたことは、成田山新勝寺一切経堂と上越教育大学図書館に所蔵される槧蔵所収本（以下各略「新勝寺本」・「上越本」）によって確

認でできる。両本によれば、その書誌は次のようである。

仏祖統紀五十四卷附音釈 宋釈志磐撰 全十五冊<sup>(28)</sup>

双辺縦二十・四横十四・二 無界十行二十字注文小字双行 単魚尾上白口下小黑口 送返点 有図

扉絵 扉絵裏云「皇図鞏固 帝道遐昌／仏日増輝 濃輪常転」次楊鶴「仏祖統紀叙」次万曆四十二年釈明昱序

(版心) 次游士任「闕仏祖統紀説」次咸淳五年釈志磐「仏祖統紀序」次校正僧五名連記 次「仏祖統紀通例」次

咸淳中釈志磐「仏祖統紀目錄」次「仏祖統紀卷第一／宋景定四明東湖沙門志磐撰」以下至卷第五十四 巻頭編著事

項卷第二十六第三十四至第五十「景定」作「咸淳」 巻第五十一至第五十四「景定」作「咸淳」又「東湖」作「福

泉」一部巻末有音釈 巻第五十三末丁裏有墨格 次咸淳七年釈志磐「刊板後記」次韋駄天像 無刊記 版心題「仏

祖統紀」題簽題「仏祖統紀」又題簽題上部云「支那／撰述」下部云「序目錄／巻二一 ■」(用紙青)

字体は明朝体ではなく、版心の形式も他の經典の嘉興藏本・覆嘉興藏本と全く異なるが、版式・字様や巻首に明人の序跋を冠する点が、東京大学総合図書館所蔵の嘉興藏(C四〇―四五一四)所収本、及び新文豊出版社が景印刊行した嘉興藏本等とほぼ一致することから、嘉興藏本の覆刻本であることがわかる。開版時期については資料不足のため確定し難いが、新勝寺に一切経を奉納するために建立された一切経堂が享保七年の建立であることから、新勝寺本は享保年間の印造と見られる。<sup>(29)</sup> よって、遅くとも享保年間には入れ版(覆古活字本)からの改刻が成っていたことがわかる。

それまで入れ版に用いられていた覆古活字本との顕著な相違点は、巻頭に明人の序跋を冠する点、巻第三を上下に分巻する点、五十五巻本である覆古活字本では原欠であった巻第二十一を無視し、巻第二十二以降の巻次を繰り上げて五十四巻本としている点、及び各巻の丁数である。

このうち各巻の丁数の違いは、覆古活字本が半葉十一行二十字であるのに対し、覆嘉興藏本が半葉十行二十字であり、一丁あたり二行少ないことに起因するものである。よって本来であれば、その分、覆嘉興藏本の丁数の方が多くなるはずであ

る。ところが実際には覆古活字本の方が丁数が多い例が十一卷（巻第十九第二十三第二十五第二十八第三十四第三十五第四十第四十四第四十八第四十九第五十二）ある。このような状況が生じた理由は、先述のように、覆古活字本（古活字本系統のテキスト）に後人の加筆が含まれていることや、覆嘉興蔵本（洪武南蔵本系統のテキスト）では儒教・道教・讖記関係の記事が意図的に削除されているためである。特に興味深いのは、槩蔵の入れ版として使われた覆古活字本と、その改刻本である覆嘉興蔵本とで、各巻の丁数にこのようなばらつきがあるにもかかわらず、全く同じ十五冊に分冊している点である。このことから、槩蔵において、分冊がいかに重要視されていたかを知ることができる。

さて、槩蔵の開版・改刻は黄檗山万福寺の塔頭である宝蔵院で行われていたが、『統紀』の嘉興蔵本も覆古活字本から改刻するために宝蔵院にもたらされたはずである。しかし当の嘉興蔵本は、上述のように、それまで入れ版に用いていた覆古活字本とはかなり異なったテキストであった。宝蔵院で改刻に当たっていた人々は当然この相違に気づいたはずである。この両版の差異を少しでも埋めようとしたのか、覆嘉興蔵本には覆古活字本の一部を取り込んだ箇所がいくつか存在し、これが底本である嘉興蔵本との差異となっている。その例を二例挙げておく。

一つは、覆嘉興蔵本の巻第十八が嘉興蔵本に比べて一丁多い点である。巻第十八は嘉興蔵本では諸師列伝第六之八全九丁であり、巻末に「此巻六十二人、本紀止録六人、遺失五十六人。」との注があり、実際、広智下第七世・神照下第七世・南屏下第七世六十二人の名を巻頭に列し、そのうち六人の伝が収録されている。これに対し、覆嘉興蔵本は巻末の注はそのままだが、七人の伝が収録され、第九丁に嘉興蔵本にない法師宗暁の伝（六人目）が丸一丁挿入されている。宗暁の伝は、宋版四十巻本では六人目のところに「法師宗暁」とあるだけで以下十四行が未刻となっており、洪武南蔵本系統の諸本に至っては「法師宗暁」の四字すらない。これに対し、古活字本・覆古活字本には、覆嘉興蔵本と同じく、六人目に「法師宗暁」の伝を収録する<sup>30</sup>。

もう一つは、巻第五十四の巻末に、嘉興蔵本にない咸淳七年志磐「刊板後記」が収録されている点である。「刊板後記」

は嘉興藏本に限らず洪武南藏本系統の諸本にはいずれも収録されておらず、宋版四十卷本系統の諸本、つまり宋版四十卷本・古活字本・覆古活字本の最終巻末にのみ収録されるものである。

このように、覆嘉興藏本にあつて嘉興藏本にない宗暁の伝と「刊板後記」とは、古活字本・覆古活字本に共通して収録されるものである。覆嘉興藏本が槩藏の改刻本であり、改刻以前には覆古活字本が入れ版されていた点を考え合わせると、これらは改刻の際に覆古活字本に依拠して補われたと考えるのが妥当であろう。

最後に、覆嘉興藏本が開版された後、それまで入れ版として使われていた覆古活字本の版木がどうなったか述べておきたい。覆古活字本のひとつ駒本Bは二十一冊本である。槩藏に入れ版されたのは十五冊本であるから、駒本Bは単行本と見てよい。これを、槩藏の入れ版と思われる東洋文庫本と見比べると、東洋文庫本にはない傷が序二丁裏と巻第一下辺に見られ、版面の痛みが進んでいる。このことから、駒本Bは槩藏に入れ版されて、かなりの年月が経ってから、単行本として刷られたものと見られる。入れ版に用いられた覆古活字本の版木は、覆嘉興藏本への改刻が成ったことで、その役割を終えたはずであるから、おそらく坊間の書肆に売却されるなどして、宝蔵院外で刷られて流通したものと思われる<sup>31</sup>。

## 五 おわりに

以上、江戸時代における『統紀』の出版と槩藏との関係について考察した。その結果を図示すると、本稿末『仏祖統紀』版本系統図』のようになる。

『統紀』は、まず咸淳七年に四十巻本が出版され、宋末には法運通塞志十五巻を加えた五十五巻本が刊行されたと見られる。この五十五巻本は明代の建文年間に大幅な増補・刪訂を加えられて洪武南藏に入蔵されたが、これとは別に日本に伝わ

り、やはり大幅な増補を加えられて出版された。これが慶長元和間古活字印本である。この増補は洪武南蔵の増補とは全く異なるもので、複数王朝に対して敬称を用いるなどの理由から、中国人ではなく、日本人または朝鮮人の手になるものと思われる。この増補を除けば、古活字本は洪武南蔵本に比べて『統紀』の原型を正確に伝えており、宋版五十五卷本が伝わらない現在にあつては大変貴重な版本といえる。ただ活字印刷は組版が容易なため一時期盛行したが、一度ばらしてしまうと増刷の際に再度活字を組まなければならなかったこともあつて、発行部数がさほど多くなかった。これに対し、整版は一度彫ってしまったえば長期間に渡つて増刷が可能であつたため、まもなく活字印刷に取つて代わることになり、特に寛永年間古活字本の覆刻本が数多く出版された。『統紀』の覆古活字本もその一つであり、寛永年間かそれに近い時期に開版されたと思われるが、無刊記本のため確かな開版年はわからない。東洋文庫本に天和二年の納経記が捺されていることから、遅くとも天和年間には開版されていたことは確かである。覆古活字本はその名の通りかぶせ彫りであるから、基本的に古活字本に忠実であるが、訓点の他、独自の判断で増補・校正が加えられており、また巻第四十九は古活字本の第三丁から第五丁を欠くため、古活字本に比べ三丁少ない。

槩蔵との関係でいうと、槩蔵が宝蔵院で開版された当初は底本とすべき嘉興蔵本が入手できなかつたらしく、その代用として覆古活字本が入れ版されていた。しかし他の入れ版と同様、後に嘉興蔵本が手に入り、これを底本とした改刻が行われた。改刻の時期については資料不足のため定かではないが、享保年間に印造された槩蔵にはすでに覆嘉興蔵本が収録されている。覆嘉興蔵本は基本的に嘉興蔵本に忠実であるが、嘉興蔵本と、それまで入れ版されていた覆古活字本との異同があまりに多かつたせいか、覆古活字本に依拠して増補した部分が見受けられる。一方、覆嘉興蔵本による改刻が成つたことで、覆古活字本の版木が不要となり、再び単行本として印造されるようになったことが確認できた。

以上の検討を通して、和刻本仏典と槩蔵の出版とがいかに密接な関係にあつたかが確認され、江戸時代における仏典出版文化の一端が明らかになったことと思う。

なお閲覧・文献複写の際、お世話になった大東急記念文庫・成田山仏教図書館・身延山大学図書館等の関係諸機関、成田山新勝寺一切経堂の全蔵調査をお許し下さった貫首橋本照稔師、調査に全面協力いただいた同寺教学課・成田山仏教図書館の皆様方には、ここに厚く御礼申し上げます。

注

- (1) 『北京図書館古籍善本書目』子部釈家類は宋版四十巻本の巻数を五十四巻とするが、その存巻(存三十六巻。一至二・四至十八・二十至四十)や、巻首にある自序に「目之曰仏祖統紀、凡之為類四十巻。」とある点、「仏祖統紀通例」の「釈志」に「…作法運通塞志■巻」とあり、法運通塞志の巻数が刻されておらず、さらに「嗣刻」、つまり未刻であると注記されている点、「仏祖統紀目録」が法運通塞志を含まない四十巻本の構成を伝えている点等から、法運通塞志十五巻を除く四十巻本として刊行されたものであると考えるのが妥当である。以下、中国における出版状況については、拙稿「『仏祖統紀』宋版の出版をめぐる―東洋文庫蔵『四庫全書存目叢書』景印本に寄せて―」(『東洋文庫書報』第四十号、二〇〇九年三月)、及び「明代における『仏祖統紀』の流伝と出版」(『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』第三九集、二〇〇九年三月)を参照。
- (2) 『経籍訪古志』(光緒十一年序排印本)巻第五子部下釈家類に「仏祖統記五十四巻、宋槧本、求古樓蔵。欠三四五六七八三十八三十九四十至四十三、凡十二巻。毎巻有行窠印。此本係妙心寺旧蔵。」とある。巻第二十一が原欠のため欠巻に数えていないのだとしたら、これこそ宋版五十五巻本ということになるが、現在伝わらない。
- (3) 佐藤成順「『仏祖統紀』の『大日本統蔵経』本と『大正新修大蔵経』本の文献上の問題点」(『宋代仏教の研究』(山喜房仏書林、二〇〇一年四月)所収。初載『三康文化研究所年報』31(二〇〇〇年三月)。以下、「佐藤成順氏」・「佐藤氏前掲論文」等という場合は、この論文を指す。
- (4) 旧称古梓堂文庫。大正時代に和田維四郎氏が久原房之助氏に要請して収集したもので、長年京都大学図書館に寄託されていたが、第二次大戦後、大東急電鉄再編の際に五島慶太氏が一括購入したものである。
- (5) 栗田文庫は、歴史学者栗田元次氏の蔵書のことであるが、昭和十年二月二日、広島にあった栗田氏の自宅が火災に遭い、「大破を被った」という。同氏『書誌学の発達』(『日本書誌学大系』8、青裳堂書店、一九七九年九月)「焼亡せる家蔵史料」を参照。
- (6) 川瀬一馬『増補古活字版の研究』(『日本書誌学大系』8、青裳堂書店、一九七九年九月)「焼亡せる家蔵史料」を参照。
- (三) 四七頁・七八三頁)、京都帝大図書館蔵本とは大東急記念文庫に帰した久原文庫本のことと見られ、西荘文庫旧蔵本は現在東洋文庫に所蔵されており、その行方がわからない。なお本版の書誌解題は、川瀬一馬『大東急記念文庫貴重書解題』第二巻仏書部(一九五六年八月序刊)、杏雨書屋『新修恭仁山莊善本書影』(武田科学振興財団、一九八五年五月)の山鹿誠之助「恭仁山莊善本解説」版本部、及

び栗田元次『書誌学の発達』「栗田文庫善本書目」古活字本の部に詳しく記されている。

- (7) 杏雨書屋本（改装本）も二十一冊。栗田文庫本のみ十冊だが、改装本なのか、火災で大破したためか不明。
- (8) 本稿末【校正僧・勸縁者・刻工名対照表】を参照。
- (9) 例えば、宋版では各篇の篇題を「釈迦牟尼仏本紀一」・「釈迦牟尼仏本紀二」・「西土二十四祖一」・「東土九祖紀二」・「東土九祖紀三」としていたのを、洪武南蔵本では「釈迦牟尼仏本紀一之一」・「釈迦牟尼仏本紀一之二」・「西土二十四祖二」・「東土九祖紀三之一」・「東土九祖紀三之二」と改めている。
- (10) 卷第三の勸縁者・刻工名は、宋版四十卷本では欠巻のため不明で、古活字本では刻されていない。また卷第二十一は宋版四十卷本は補鈔で、古活字本は原欠である。
- (11) 名文光教志二巻は、宋版四十巻本では卷第三十五第三十六、古活字本では卷第五十第五十一にある。
- (12) 表紙に「大識」、第一冊「仏祖統紀序」一丁表欄外に「宥豊」の署名があることから、江戸後期の新義真言宗の学僧で、智積院に学び京都の清和院に住した宥豊（一七六〇～一八二三）、字大識の旧蔵本とわかる。『日本仏教人名辞典』（法蔵館、一九九二年一月）七八〇頁を参照。他に各冊書背に「文外」の書き入れと、二・三字分の墨消しがある。
- (13) 川瀬一馬『日本書誌学用語辞典』（雄松堂出版、一九八二年十月）の「古活字版」・「覆古活字版」二条、『日本古典籍書誌学辞典』（岩波書店、一九九九年三月）の岡雅彦「古活字版」・「古活字覆刻整版本」二条を参照。
- (14) 圭室文雄『日本名刹大事典』（雄山閣、一九九二年八月）四七一頁を参照。
- (15) この他に開版の下限を詰められる可能性のある資料として、寛文十二年刊行の『仏祖統紀標条』二巻がある。駒沢大学図書館に所蔵されるほか、先述の栗田文庫所蔵の古活字本には寛文十二年中村五兵衛版総目録一冊が付されていたという。これは宋版五十五巻本系統のテキストにもとづいて作られた事項索引であり、各事項に冠された丁数はざっと見たところ古活字本・覆古活字本と一致する。よって、もしこの『標条』が覆古活字本を対象に作成されたものであれば、覆古活字本の開版の下限を寛文十二年まで詰めることができる。このことを確かめるため、前節で述べた古活字本と覆古活字本で丁数に三丁の異同がある巻第四十九について『標条』で確認したところ、果たして古活字本の丁付けと一致していた。よって『標条』は覆古活字本を対象としたものではなく、覆古活字本の開版年を詰める資料とはならない。
- (16) 同様の例は本文中にも存在する。古活字本では卷第三十三の十七丁裏に一行目から二行目にかけて炎熱地獄について説き「墮此獄中」と締めた後、「八名無間」と無間地獄について説くが、覆古活字本では「墮此獄中」以下に「七名極熱…此獄中」二十二字があつて、極熱地獄について説いている。おそらく覆古活字本の開版の際、十五丁裏の「八熱地獄図」では（一）等活地獄から（八）無間地獄までが階層別に図式化されているにもかかわらず、本文に（七）極熱地獄の説明がないことを不審に思い、脱文とみなして補ったものと考えられる。その結果、古活字本に比べ、本文が二十二字、つまり一行と二字分増えたが、第十七丁裏の六・七行目を二十一字に詰めたため、八行目以降はさっぱり一行のズレのみとなっている。これは、覆刻の際、古活字本の欠文を補った例であるが、宋版四十巻本・永楽

南蔵本・嘉興蔵本（洪武南蔵本では欠巻）ともこの二十二字がないことから、やはり覆刻の際に独自の判断で補ったことになる。なお宋版四十巻本は志磐の生前に開版されたものであるから、これらの欠文は志磐以来のものということになる。佐藤氏はこのことに気づかずに、覆古活字本と共通点の多い中続蔵本を大正蔵本と比較して、大正蔵本にこの二十二字がないことから、大正蔵本の単純な誤脱であるとする。

(17) なお大正蔵本の底本である増上寺報恩蔵所蔵の嘉興蔵本は二序本である。

(18) 野沢佳美『明代大蔵経史の研究―南蔵の歴史学的基礎研究―』（汲古書院、一九九八年十月）第一部第四章「定巖浄戒・玄極居頂の南蔵入蔵著述について―北蔵除外の背景―」、拙稿「中国における『禪源諸詮集都序』の流伝と出版」（『二松学舎大学人文論叢』第76輯、二〇〇六年三月）を参照。

(19) 「入れ版」とは、佛敎大学の松永知海氏が『獅谷法然院所蔵麗蔵対校黄檗版大蔵経並新続入蔵経目録』（佛敎大学仏敎文化研究所、一九八九年十二月）の「解題」の中で使用して以来、氏の論文中にしばしば見られる言葉で、鉄眼が槩蔵を刊行した当初の槩蔵収録経典のうち、嘉興蔵本を底本とせず、朝鮮版や和刻本を版下に用いたり、町版の版木を使って印刷した経典のことを指す。

(20) 拙稿「日本における『禪源諸詮集都序』の受容と出版」（『日本漢文学研究』創刊号、二〇〇六年三月）を参照。

(21) ある特定の場合とは、一冊に収まりきらない大部の経典のことである。このような経典の場合、一冊中に二字の千字文が混在しても、その経典を検索する上でさしたる影響はないため、千字文に対する配慮はそれほど厳密ではない。例えば『大宝積経』は、百二十巻中、巻第九至第十二を収める一冊に千字文「龍（九・十）」と「師（一・二）」が同居している。

(22) 一例を挙げると、月山寺本『大般若波羅蜜多経』六百巻では、千字文全六十字のうち第一字「天」字の第一冊の巻首に扉絵、第六十字「奈」字の末冊である第二百二十冊の巻尾に韋駄天像がある。

(23) 一例を挙げると、月山寺本第六十八函には千字文「靡・恃」二字計六冊を収め、「靡」字には『仏説首楞嚴三昧経』等四経、「恃」字には『賢劫経』を収録するが、扉絵は第六十八函の第一冊の巻首、韋駄天像は第六冊の末尾に付されている。

(24) 野沢佳美「江戸時代における明版嘉興蔵輸入の影響について」（『立正大学東洋史論集』第13号、二〇〇一年九月）を参照。

(25) なお拙稿「江戸時代の和刻本仏典の出版と黄檗版大蔵経―成田山仏敎図書館蔵『阿毘達磨俱舍論』を手がかりに―」（『日本漢文学研究』第2号、二〇〇七年三月）において、これらの特徴を手がかりに、『阿毘達磨俱舍論』の和刻本が槩蔵の離れ本であることを論証したことがある。

(26) 松永知海「後水尾法皇下賜正明寺蔵初刷『黄檗版大蔵経』目録」（『仏敎大学総合研究所紀要別冊附録』、仏敎大学総合研究所、二〇〇四年十二月）による。

(27) 『獅谷法然院所蔵麗蔵対校黄檗版大蔵経並新続入蔵経目録』（前掲）、内山純子・渡辺麻里子「曙光山月山寺了翁寄進鉄眼版一切経目録」（曙光山月山寺、二〇〇一年五月）を参照。なお前者は巻第二十二を欠巻とするが、これは巻第二十一の誤りであろう。

(28) 新勝寺本は巻第三十至第三十三を欠く十四冊本であるが、この四巻は上越本の第八冊に当たる。また新勝寺本は改装本であるが、両本

- の分冊は全く同じである。なお国会図書館にも同版が一部単独で所蔵されているが、分冊は若干異なる。
- (29) なお上越本は文政年間の印造である。
- (30) 古活字本が宋版四十巻本にない宗暁の伝を何によって収録したかについては、後考に俟ちたい。
- (31) なお東総本Aは二十一冊本であり、かつ版面の状態が東洋文庫本と一致することから、駒本Bより以前に刷られた単行本に違いないが、今回調査した傷の箇所からは、槩蔵入れ版前の刷りか、改刻後の刷りかは確定できなかった。

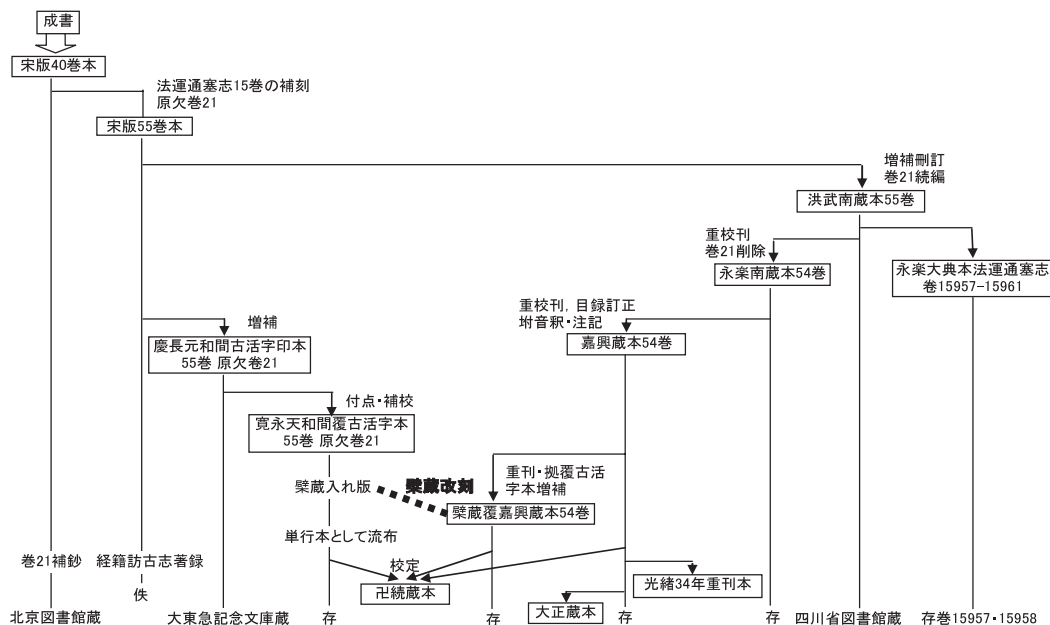
【校正者・勸縁者・刻工名対照表】				
宋版四十卷本		古活字本		覆古活字本
所在	内 容	所在	内 容	内 容
序後	掌局齋 真要 同校正吉祥安樂山教忠報国教寺首座沙門必昇 校正前住持華亭先福教寺伝天台宗教沙門慧舟 校正住持吉祥安樂山教忠報国教寺伝天台宗教沙門善良 校正住持東湖月波山慈悲普濟教寺伝天台宗教沙門宗淨 校正特賜仏光法師左右街都僧録主管教門公事住持上天竺 教寺賜金襴衣法照 勸縁邑士 胡慶宗 季奎 吳邦達 同校正贊縁居士 秦宇曹説 九蓮厲心	序後	同左(掌局齋之齋下有生字)	同左
卷1末	上天竺仏光法師(法照)施芝券貳阡道	卷1末	無	無
卷2末	徐開刊 月波無住法師(宗淨)施芝券二百道	卷2末	無	無
卷4末	東湖尊教双清法師(処謙)施芝券一百道	卷4末	同左	同左
卷5末	月波石林法師(文介)施芝券二十道飯穀二石	卷5末	同左	同左
卷6末	尊教沙門契心施芝券二十道○資敬沙門淨真芝券十道○広 濟沙門元信芝券九道	卷6末	無	無
卷7末	奉川章臨刊 宝雲無等法師(妙有)施芝券二十道慧光慧日 法師(恵松)施芝券十道	卷7末	無	無
卷8末	前洞山槃洲法師(道枢)施芝券八道前福海■■■法師(時 口)施芝券十道	卷8末	無	無
卷9末	戒香鑑翁禪師(師亮)同知客智周侍者覺円共施芝券一百 二十道	卷9末	同左(22a10-11に書入)	無
卷10末	奉川章臨刊鹿野退省法師(志純)施芝券一百道	卷10末	無	無
卷12末	南湖徽首文敏知客子謙同沙門雲章等施芝券八十道南湖首 座聞熏施芝券八道	卷12末	同左	同左
卷13末	白衣広仁首座法雨化応氏懿真応氏靖修芝会二十道	卷13末	同左	同左(二作一)
卷14末	棲心高峯元妙同広寿懷信法師慈福元覺棲心善度沙門行為 懷玉奉聖徳月居士王楠張妙嚴張氏妙寿張氏妙明林季三娘 張興等共施芝券七十道	卷14末	無	無
卷15末	南湖沙門道祺同善言徳興善為応中妙宝清旦■■■共施芝券 十道三十二道○阮山沙門一輩化衆芝会十二道	卷15末	無	無
卷16末	保慶南雲法師(元善)施芝券四十道梨板二十口宝嚴無文 法師(懐錦)施芝券十道	卷16末	無	無
卷22末	茅山住山惟大施芝券十道○珠山沙門善弘化衆芝券十六道 ○西山沙門善業化衆芝券十六道	卷22末	無	無
卷23末	珠山沙門如愚衆芝券十七道福泉沙門真要施芝券六十道	卷23末	無	無
卷24末	奉仏嗣男吳邦達施芝券二百道上薦考君吳千六府君妣■■ ■■■■	卷24末	無	無
卷27末	玉牒清心居士趙氏希淑施芝券二百八十道	卷27末	無	無
卷28末	奉仏女弟子鮑氏妙円施芝券一百五十道	卷28末	無	無
卷30末	徐泳同胡昶 天竺靈山妙心芝券十道○姑蘇沙門從雅惟允芝 券八道○化城自固山主芝券八道	卷30末	無	無
卷31末	奉仏嗣男李華施芝券二百道上薦考季小六府君妣胡氏三孺人	卷31末	無	無
卷32末	奉仏嗣男胡慶宗施芝券二百道上薦考胡百二府君	卷32末	無	無
卷34末	如菴禪師(如敬)施芝券四十道仙巖禪師(若愚)芝券四 道○天壽西堂(師信)芝券八道	卷34末	無	無
卷35末	四明徐泳刊	卷50末	同左	同左
卷36末	定海進士馮応竜同母汪氏妙淑滕氏智柔共施芝券二十道	卷51末	同左	同左

【凡例】

- は原文で使われている句点      〈 〉は原文の小字双行注
- は墨格(未刻の墨刷り部分)      □は残欠による未判読文字
- ( )は著者による注記・校記

江戸時代における『仏祖統紀』の出版

【『仏祖統紀』版本系統図】



【覆古活字版面状態対照表】

傷(匡郭の欠落)の箇所	成田本	大東急本	国会本	家蔵本	東総本B	正明寺本	東洋文庫本	法然院本	月山寺本	駒本A	東総本A	駒本B
序2b左辺中ほど	無	無	無	無	無	未見	無	未見	未見	欠	無	10mm
目録16a上辺19	痛ミ/※	痛ミ/※	痛ミ/※	6mm	6mm	未見	6mm	未見	未見	欠	6mm	6mm
巻一1a下辺「若」字下	無	無	無	無	無	未見	無	未見	未見	欠	無	3mm
巻一1a8b上辺右	無	無	無	20mm	64mm	未見	64mm	未見	未見	64mm	64mm	?
巻一1a1a右辺「諸」字脇	無	無	無	2mm	2mm	未見	2mm	未見	未見	2mm	2mm	?
巻一1a3b左辺中ほど	2mm	2mm	2mm	2mm	2mm	未見	刷フス	未見	未見	2mm	2mm	2mm
巻二21a右辺「難」字脇	無	無	無	7mm	7mm	未見	7mm	未見	未見	7mm	7mm	7mm
巻二21a右辺「第」字脇	無	無	無	18mm	18mm	未見	18mm	未見	未見	18mm	18mm	18mm
巻二21a右辺「景」字脇	13mm	13mm	13mm	13mm	13mm	未見	13mm	未見	未見	13mm	13mm	13mm
巻五519b左辺上部「而」字脇	無	無	無	無	無	未見	2mm	未見	未見	2mm	2mm	2mm
巻五519b左辺中部「詔」字脇	無	無	無	無	2mm	未見	2mm	未見	未見	2mm	2mm	2mm
巻五519b左辺中部「天」字脇下方	1mm	1mm	1mm	1mm	1mm	未見	1mm	未見	未見	1mm	1mm	1mm
巻五519b左辺下部「太」字脇下方	無	無	無	無	無	未見	無	未見	未見	無	無	3mm
巻五520a右辺「子」字脇	無	無	無	無	無	未見	無	未見	未見	1mm強	?	3mm
巻五520a右辺「金」字脇	無	無	無	無	無	未見	無	未見	未見	無	無	10mm
巻五520a右辺「納」字脇	無	無	6mm	6mm	6mm	未見	6mm	未見	未見	6mm	6mm	6mm
梁蔵との関係	単行				梁蔵入れ版				単行			

\*=1mmほどの斜めの亀裂

未見=現物未調査

?=該当箇所未確認

【和刻本諸本内容構成対照表】

宋版40巻本		古活字本		覆古活字本										覆嘉興藏本		嘉興藏本			
構成	丁数	構成	丁数	成田本 冊	国会本 冊*3	家藏本 冊	東総本B 冊	東洋文庫本 冊	正明寺本 冊	法然院本 冊	月山寺本 冊	駒本A 冊	東総本A 冊	駒本B 冊	構成	丁数	冊	新文豊本 丁数	東総本 丁数
—	—	—	—	扉絵	×	×	×	×	?	?			×	×	扉絵			—	扉絵
巻首	19a	巻首	22a									欠			巻首	6, 12, 9	1	8, 12, 9	5, 12, 9
巻1	17b	巻1	19a	1	1	1	1	1	1	1	1		1	1	巻1	20b	1	20b	22a
巻2	19a	巻2	20b												巻2	22a	2	22b	32a
巻3	欠	巻3	56a	2	2	2	2	2	2	2	2		2	2	巻3上	32a	2	32b	32a
巻4	16b	巻4	18a												巻3下	29b	2	29b	
巻5	26a	巻5	28b	3	3	3	3	3	3	3	3		3	3	巻4	19b	3	19b	
巻6	27a	巻6	29b												巻5	31a	3	31a	
巻7	9b	巻7	10b	4	4	4	4	4	4	4	4		4	4	巻6	32b	3	32b	
巻8	15a	巻8	16b												巻7	11b	4	11b	
巻9	20b	巻9	22a	5	5	5	5	5	5	5	5		5	5	巻8	18a	4	18a	
巻10	26b	巻10	29a												巻9	24a	5	24a	
巻11	12b	巻11	13b												巻10	32a	5	32b	
巻12	9b	巻12	10b												巻11	15a	6	15a	
巻13	10b	巻13	11b	6	6	6	6	6	6	6	6		6	6	巻12	11a	6	11b	11a
巻14	14b	巻14	15b												巻13	12b	6	12b	
巻15	17b	巻15	18b												巻14	17a	6	17b	17a
巻16	14b	巻16	15b												巻15	20b	7	20b	
巻17	17b*1	巻17	10b												巻16	17a	7	17a	
巻18	9b	巻18	8b												巻17	11b	7	11b	
巻19	2a	巻19	3a	7	7	7	7	7	7	7	7		7	7	巻18	10b	7	9b	
巻20	1b	巻20	1b												巻19	2a	7	2a	
巻21	1b*2	巻21	原欠												巻20	1b	7	1ab	
巻22	9b	巻22	10a												巻21	11a	7	11b	11a
巻23	10b	巻23	11a												巻22	12a	8	12a	
巻24	12b	巻24	13a												巻23	11b	8	11b	
巻25	14b	巻25	14b	8	8	8	8	8	8	8	8		8	8	巻24	22b	8	22b	
巻26	13a	巻26	13b												巻25	12b	8	12b	
巻27	33b	巻27	36a												巻26	39b	9	39b	
巻28	33b	巻28	31b	9	9	9	9	9	9	9	9		9	9	巻27	38b	9	38b	35b*5
巻29	25b	巻29	31b												巻28	30b	10	30b	
巻30	21b	巻30	23b	10	10	10	10	10	10	10	10		10	10	巻29	25b	10	25b	
巻31	16b	巻31	17b												巻30	19a	10	19a	
巻32	27b	巻32	30b												巻31	34 b	11	34b	
巻33	14b	巻33	19b	11	11	11	11	11	11	11	11		11	11	巻32	22b	11	21b	
巻34	18b	巻34	20b												巻33	22b	11	22b	
		巻35	21a	12	12	12	12	12	12	12	12		12	12	巻34	15a	12	15a	
		巻36	24a												巻35	13b	12	13b	
		巻37	34a	13	13	13	13	13	13	13	13		13	13	巻36	36a	13	36a	
		巻38	18a												巻37	20a	13	20a	
		巻39	19a												巻38	20b	14	20b	
		巻40	39a	14	14	14	14	14	14	14	14		14	14	巻39	41b	14	41b	
		巻41	22a												巻40	21a	15	21a	
		巻42	21b	15	15	15	15	15	15	15	15		15	15	巻41	23b	15	23b	
		巻43	31a												巻42	33a	16	33a	
		巻44	27a	16	16	16	16	16	16	16	16		16	16	巻43	28a	16	28a	
		巻45	22a												巻44	18b	17	18b	
		巻46	29b	17	17	17	17	17	17	17	17		17	17	巻45	29b	17	29b	
		巻47	20b												巻46	20b	18	20b	
		巻48	25a	18	18	18	18	18	18	18	18		18	18	巻47	26b	18	26b	
		巻49	23b 20b												巻48	5b	19	5b	
巻35	24a	巻50	26b	19	19	19	19	19	19	19	19		19	19	巻49	23b	19	23b	
巻36	13b	巻51	15a												巻50	21b	20	21b	
巻37	15b	巻52	17b	20	20	20	20	20	20	20	20		20	20	巻51	18b	20	18b	
巻38	17a	巻53	18a												巻52	9b	20	9b	
巻39	29a	巻54	30b												巻53	33b	21	33b	
巻40	18b	巻55	20a4	21	21	21	21	21	15	15	15		21	21	巻54	21b	21	21b	17b*6
後記	19a	後記	20a9-b						?	?	?				後記	22ab	15		
—	—	—	韋駄像	×	×	×	×	×	?	?	×		×	×	韋駄像			—	欠

\*1 原欠7-13。 \*2 補鈔。 \*3 分冊は原装による。 \*4 新勝寺本欠。 \*5 36丁以下欠。 \*6 18丁以下欠。 内閣文庫所蔵本共21丁、第15冊末有韋駄天像。

【版本略称一覧】  
 成田本—成田山仏教図書館蔵本  
 国会本—国立国会図書館蔵本  
 家藏本—著者家蔵本  
 東総本(A・B・嘉興藏所収本)—東京大学総合図書館蔵本  
 正明寺本—法輪山正明寺鑿藏所収本  
 東洋文庫本—東洋文庫(岩崎文庫)蔵本  
 法然院本—獅谷法然院鑿藏所収本  
 月山寺本—曬光山月山寺鑿藏所収本  
 駒本(A・B)—駒沢大学図書館蔵本